

家族の行方

－希薄関係な娘たちへ遺す親の心情－

Where the family is going

－Parent's feelings left to their daughters in a thin relationship－

平山 妙子

Taeko Hirayama

〈摘要〉

姉妹というと買い物も一緒、悩みも母親に話す、より理解し合える中の良いイメージがあるが、反対に嫉妬やライバル関係といったマイナスの部分が強調されることもある。統計によると、姉妹間で仲が悪いのは7%とこの数字から見ると、仲が上手くいっていない姉妹は少数と言えるかもしれない。

また、姉妹間の拗れには、子どものころからの母親の養育姿勢にも問題があるとされ、養育過程において、姉妹に仲違いをさせるように仕向ける母親が問題視されている。さらに、この状況関係での姉妹が大人になって親の介護問題や遺産相続問題が発生した時に、昔からくすぶっていた姉妹問題が爆発することがある。姉妹喧嘩は親の愛の奪い合いと言うが、親が倒れたり、亡くなった後の方の問題が大きくなることもある。相続も介護も現実の問題として解決していかなければならないが、深い心の問題があると、悔しさや悲しいほどの怒りで感情的になり、問題解決は遠のいてしまう。

老親が心細く身の老体を感じるほど、娘への思いは子への思い全ての心情深きもの。これまでの親子関係と姉妹関係がどのように親への思いに届くのか、大人の姉妹トラブルと心の癒し方を親の介護を通して考える。

〈Summary〉

Speaking of sisters, we have a positive impression that they understand each other, such as they shop together or they talk their troubles to their mother, on the other hand, the negative parts sometimes are emphasized such as the jealousies or rivalries they have. I heard static indicates that sisters on bad terms accounts for 7%, that looks the sisters they are not getting along well are a few.

With twists between sisters, it is said there is a problem of mother's posture

of bringing up children from childhood, and the mothers make her daughters quarreled are held in question. To make matters worse, sister's problems those have been smoldering for long time could be flared up when they face the parents' caregiving or property problems after growing up. A quarrel between sisters is about scrambling parents' love, the problems sometimes will be bigger after the parents will collapse or die. They will have to solve the caregiving or property problems as a matter of reality, however, if there are deep emotional problems, solving them will become distant as a result of getting emotional by chagrin or pitifully anger.

The more old parents feel their old lonely, the more they think their daughters deeply. How the relationship between parents and sisters attain the parents' desire? I would like to think the adult sisters' troubles and how to cure hearts through parents' caregiving.

〈キーワード〉 老親 心情 希薄 機能不全家族 アダルト・チルドレン

I. 研究意識と背景

1. 家族・姉妹のトラブル起因

どんな家族や姉妹にもトラブルは起こる。姉妹は、争ったり、互いに劣等感を感じたり、トラブルが起きる方が普通である。例えば、最初の子が生まれて、次の子が生まれれば、上の子に赤ちゃん返り（退行現象）が起きるのは普通のことである。その姉妹の争いを収めるのが親の役割である。

しかし、親の中にはそんな力と心の余裕がない人もいて、中にはえこひいきをする親もいる。そのようになると姉妹問題をかえって悪化させてしまう。特に自分の全ての面が劣っていると感じていたりする場合に、問題が生じやすい。姉妹（兄弟）関係には、意外と問題が拗れやすいともいう。二人だと完全に利害が対立し、他の姉妹（兄弟）がなだめ役になれないからとも言われる。

また、姉妹（兄弟）関係は女ばかりの姉妹、男ばかりの兄弟という男女という偏りにも違いはあるとも言われている。

2. 家族システム

家族システム（家族メンバー同士の複雑な人間関係）の中に、さらに、小さなシステム（人間関係）がある。夫婦システム、親子システム、兄弟姉妹システムがある。このサブシステムが一つでもまともに機能していれば、問題は起こりにくい。夫婦仲が良いか、親

子関係が良いか、姉妹（兄弟）関係が良いか、どれかが良ければ、たとえ家族の中で問題が起きてても大問題には発展しにくい。

3. コンプレックス・同胞葛藤（姉妹葛藤）・姉妹（兄弟）喧嘩

姉妹（兄弟）喧嘩問題で悩んでいる人が、単純に兄弟姉妹を嫌い、縁が切れれば良いとは思いますが、なかなかそうとは割り切れない。姉妹（兄弟）だからこそ、他人とは異なる激しい憎しみを抱くし、同時に憎しみきれない面もある。心理学では姉妹（兄弟）への複雑な思いを「同胞葛藤（姉妹・兄弟葛藤）」などと呼んでいる。

4. 親の愛し方

親というものは、まじめな良い親には子どもを平等に愛そうとする。それは正しいことでもあり、差別してはならない。しかし、幼い子どもが捉える親に求める愛情には、独り占めにしたい独占欲の強い時期がある。そのような時期には、幼い子どもの心には受け入れがたい時である。ただ、子が望む心として、「あなたのことが一番好きよ」と言ってもらいたい一心である。子どもに、一番愛されていると感じてもらうために、子どもが甘えてくるときには甘える必要があると理解することを学ぶことであり、子どもの心を傷つけることなく、幼い子どもが受けるその傷が、大人になってその影響が尾を引くこともあると気が付く親でなければならない。

親は、子どもが差別意識を持っていることに気づきにくい。最近の調査によると、現代の姉妹（兄弟）は、昔ほど濃い人間関係を持たない。それが、現代的姉妹（兄弟）なのであろう。しかし、これでは大きな問題が起きたとき対応ができない。心の底に葛藤を抱えていると、ここで爆発する。人間関係が薄くなりがちで、姉妹（兄弟）の数も少ない時代社会は、姉妹（兄弟）のトラブルが起こりやすい。

II. 研究目的による仮説

1. 姉妹（兄弟）の心理的影響

姉妹（兄弟）も、私たちの人間関係に及ぼす影響は少なくない。意外に盲点になりやすく、それ故に問題となることに対して解決するキーパーソンになることも多い。

また、パートナーシップでは、パートナーとの距離と姉妹（兄弟）の心理的距離が近くなることもあり、見えないところで嫉妬や競争などを生み出していることもある。姉妹（兄弟）は、横の繋がりに大きな影響を及ぼしているので、仲間や同僚から近所付き合いとの関係性にヒントを与えてくれる存在でもある。つまり、姉妹（兄弟）というのは、「横の繋がり」のシンボルで、親子（縦の繋がり）とは違い、同級生、同期、近い世代、近所つきあい、友人関係、仲間、ライバル（競争）、年の近い恋人、先輩後輩などの関係

に少なくない影響を与えている。

そして、姉妹（兄弟）というのは、心理学的には「親子関係」というのを非常に重視している。「親について同じ目線で話ができる相手」である。また、いわゆる“共同戦線”を張る者同士の心理的な連携も生まれる。親ほど近くはないが、他人よりもずっと近い存在、ということで扱う問題によってはキーパーソンになってくることも少なくない。例えば、「夫婦」や「長年付き合っている恋人」との関係性を見ていく場合、パートナーと姉妹（兄弟）の位置がかぶってきている場合もある。だから、「妻と妹がライバル的な心理状態」とか「夫が兄に嫉妬している」といった問題も出てきたりする。案外、すぐ横にいるものであり、姉妹（兄弟）の存在は盲点になりやすいのも特徴となる。

姉妹（兄弟）は、距離感だけで見れば、姉妹（兄弟）の距離というのは親よりも遠く、友人よりも近い、という感じになる。「恋人」と距離感が競うことも少なくない。ただ、「仲たがいでいる姉妹（兄弟）について、全然連絡を取っていない姉妹（兄弟）について、その限りではない。

また、姉妹（兄弟）の仲の良い悪いがもたらす影響として、姉妹（兄弟）というのは、「親」に対して共同戦線を張る同志のような位置付けにあるため、同志の中に諍いがあるとすれば、チームワークが乱れてしまう。したがって、姉妹（兄弟）の中で孤立していた人は、社会の中でも一匹狼になりやすいし、姉妹（兄弟）が喧嘩ばかりしていた人は、仲間に対しても好戦的な性格になりやすいようである。そして、姉妹（兄弟）の中に許せない相手がいると、他の人間関係でもトラブルを抱えやすい。

これは、親子間関係でも同じであるが、家族という、とても距離の近い中で起こる問題は、周りに投影されやすい。親子と違って、姉妹（兄弟）の場合、年が近い分だけ「拗れた友達とはそれっきりの関係」になってしまうことも少なくない。つまり、関係改善へのモチベーションが親子よりも上がり難いように思える。しかし、順調にいけば、一緒に親を見送る関係でもある。

2. 親が関わる「姉妹（兄弟）不仲」には

幼い頃はだれでもする「兄弟喧嘩」。しかし、子どもを持つ年齢になっても尚、自分の姉妹（兄弟）が不仲に悩む人は数多い。大人の姉妹（兄弟）不仲には様々な原因があるが、特に姉妹の場合に多いのは、母親との関係性が要因とある。例えば、片方が母親と仲良しで、もう片方がギクシャクしているパターン。片方ばかり可愛がられるというジェラシーから不仲になる。母親を巡る不仲には、幼い頃から続いていることもあれば、時期によって仲良しの側が変わることもあるという。「母親が作為的に姉妹の中を引き裂く場合もあり、姉妹仲が良すぎると、母親がジェラシーを感じやすいこともあり、姉妹がタッグを組んで自分に歯向かうことを恐れることもある。特に、権力意識が強く、子どもをコントロールしたがる「支配型」の母親の場合、子どもが自分に服従しなくなることを恐れ、意識的、

あるいは無意識に、姉妹仲を悪くさせるよう画策するようである。

また、姉妹（兄弟）の不仲のもう一つの大きな原因には「ライフステージの変化で起こる嫉妬、焦りが姉妹（兄弟）不仲」になるという。「ライフステージの変化」によって、姉妹（兄弟）関係には、これまで気にならなかったことがチクチクと胸に刺さってくる。特に、兄弟が異性である場合、「将来活躍してほしい」と思う人が多いのに、同性の姉妹に対しては、応援したい反面、素直に活躍を喜べない思いが湧きやすいとある。そして、もう一つの原因として、幼い頃から感じる「性格が合わない」ということもある。「友だちだったら付き合わないタイプ」ということはどうしてもある。性格の「会う・合わない」は、誰にも少なからずあるものであり、血縁関係の場合はそれが根深くなりがちになる。その点では、あくまで嫉妬や性格の不一致であり、深い憎しみでない場合には、ある程度自然なことであると割り切ることも必要になる。また、異性の姉妹（兄弟）の場合、もともと性別が異なるため大きな問題にならないが、特に性格の違いで対立が根深くなるのは、同性である「姉妹」の場合とある。ここで、どんな性格同士の姉妹だと不仲になりやすいのかを挙げる。

- 1) 片方がネガティブでコミュニケーションが得意でないタイプ
- 2) 片方が社交的で明るく友だちが多いタイプ

つまり、「陰と陽」の関係性である。そうした組み合わせで上手くいく場合もあるが、そうでない場合、ネガティブな方が明るい姉妹に対して「どうしていつもそんなに楽しそうなのだ」「許せない」という思いを一方向的に抱いてしまう。また、一方が恨みを抱いていても、恨まれる側は「大丈夫かな」と相手を心配したり、できれば上手くやっていきたいと思い、歩み寄ったりすることも多いそうである。要するに、「正反対のタイプの場合、嫉妬される側が相手の気持ちに配慮するのが上手くやるコツ」になる。例えば、自分が上手くいっている時に、母親には伝えても、あえて、姉妹にわざわざ言うことでもないことを話す。相手が僻むようなことは耳に入れないようにすることも必要になる。

逆に、自分の弱い部分を見せたり、相談したりすると、「こんなに幸せそうなのに意外と大変なことものだ」と思い、相手の嫉妬心が和らぐ。

3. 機能不全家族

機能不全家族とは「子育て」「団欒」「地域との関わり」と言った、一般的に家庭に存在すべきとされる機能が健全に機能していない家庭の問題を指す。機能不全家族内で育った子どもは、機能不全な環境や考え方が当たり前であるかのように認識して成長するケースが多く、また、幼少期の重要な人格形成において愛情を得る機会が非常に乏しいことなどにより、自己愛・自尊心・他者への共感、他者の苦しみに対する理解等に欠けた人間になりやすい。こうして、機能不全家族から社会と健全な関係を築くことができない大人

が出ることもある。しかし、必ずしも機能不全家族に生まれ育ったものが必ず社会不適応な人間になるとは限らないのも事実である。

また、アダルト・チルドレンを生み出す家庭のことも「機能不全家族」と言い、あくまでも、子どもの目から見て、家族として機能していない家族も指す。

昨今、8割から9割の家族が機能不全の要素を含んでいると分析されており、どこに家族にもあることである。自分が機能不全家族で育っているかどうかを認めることは、親を責めるものでもなく、親を傷つけるものでもなく、親と子の価値観のズレに気づくものだと思う。したがって、機能不全家族だと認定するのも「自分」であり、機能不全家族で育ち、アダルト・チルドレンであると認定するのも、「自分」である。「アダルト・チルドレン」という言葉は、「自分が自分のために使う言葉」であり、今の自分自身を変えたいと思った時に使う言葉である。

4. 2つのタイプのアダルト・チルドレン

アダルト・チルドレンのタイプには2つのグループに分かれる。

1) 機能不全家族の内、親に肉体的、精神的に虐待され続け、自己肯定感を全く得られない状況で育ったアダルト・チルドレン

(無条件のマイナスストロークを与えられ続けたか、あるいは、無視されるというストロークの無い状態が続いた体験により、強烈な自己否定が拭えられない人)

2) 機能不全家族の内、家庭内の内のメンバーの仲が悪かったり、冷たい空気が漂っているなど、何か問題を抱えていて、そのため、唯一子どもが、バランスの取れた大人として振り舞わなければいけなかったアダルト・チルドレン

(条件を与えることでストロークすること。子どもが子どもらしくいられる自我状態でいえば、自由な子どもの心が認められない状態が続いた人)

とくに、アダルト・チルドレンの人は、何をやっても自分の存在を全否定されることが多い状況で育っている。また、それでも、その環境の中で生きていかなければならない子どもは、波風を立てないように自分を押し殺し、表面上は何もなく過ごす術に長けていく。なので、感受性はいやがおうでも強く敏感になっていく。しかし、いくら気を使っても、常に自分が存在していることに罪悪感や不安を抱いてもいく。逆に、その空虚感を何か一定のもの、暴飲暴食、過度の喫煙、買い物、恋愛、仕事などで満たそうとして、依存症に発展していく。そのように、指示されなくても親が喜ぶであろう姿を察し、それに向かって、どんなに苦しくても頑張ってしまう。親の願望が自分の願望だと錯覚さえていく。親から見れば聞き分けが良く、成績や面倒見の良い、良くできた手のかからない子どもである。子どもなのに、一番家族のことに神経を配る大人であり、共依存症者の生い立ちを持っている。このように、2つのタイプのアダルト・チルドレンは、機能不全家族に縛ら

れる必要がなくなった大人になっても、身につけた仮面や演技のまま、共依存や依存という症状に発展させていく。つまり、子どもの苦しみを幾重にも誇大化させながら生きていくのである。アダルト・チルドレンはどちらのタイプにしても、機能不全家族という環境の中で、ありのまま自分を受け入れられる場所を知ることがない。アダルト・チルドレンは空虚感につきまといわれ、その虚しさを埋めるため、大人になった今でも何らかの生きづらさに悩まされる。それは、依存症や共依存症に代表とされるものであるが、他の様々な心身症や精神障害だけでなく、慢性の肩こりや腰痛、腹痛など、その人の弱いところに出る身体症状にも表れると言われている。

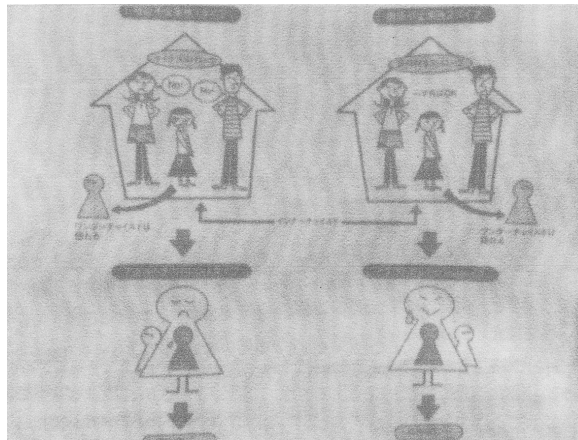


図1 アダルト・チルドレンのプロセス

下記の図は、アイスバーグモデル（氷山の一角）と言う。現在起きている様々な症状、問題などは、氷山の一角であり、その氷のずっと奥深い海底には、機能不全家族で感じ続けてきた「見捨てられた不安」が眠っている。

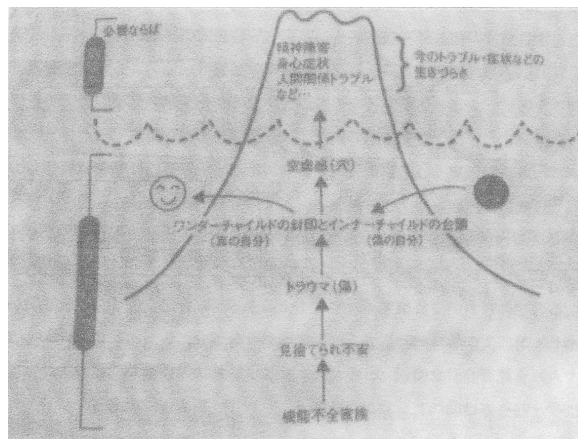


図2 構図 アイスバーグモデル（氷山の一角）

5. 老親を抱える介護家族の支援

作今、介護を担う家族は「介護家族」と呼ばれ、新しい家族として捉えられている。介護は介護者一人だけの問題ではない。家族全体の問題である。介護という課題は「介護家族」にどのような変化をもたらすのか、そして、その支援はどのように行う必要があるのか。

また、わが国においても家族看護モデルが構築され、看護職が様々な家族理論やモデルを使用して、家族全体にアプローチするようになった。家族成員の誰かに健康問題が生じた場合は、その個人だけに影響を及ぼすだけでなく、家族にも大きな影響を与える。また逆に、家族の関係性が悪い場合は、家族成員の誰かに健康問題が生じてしまうこともある。このように、家族は家族成員によって構成されているが、機能するのは家族全体としてである。したがって、家族一員の変化は家族全体の変化となって現れる。「介護家族」では、家族の中に介護が発生することは、これまでの生活に大きな影響を及ぼす。ライフスタイルの変更を余儀なくされたり、それまでの家族内の役割を変えなければならなくなる。介護という新しい課題に直面した家族は、介護に伴う生活の変化や新たな役割を受け入れることから始めなければならない。ストレスの多い状況から家族不和が生じることもあれば、家族が協力して介護を分担し、家族の相互理解を深め、家族の絆を強めていくこともある。医療的な専門学から見ると、介護を家族全体の問題と捉え、家族という単位への影響を考慮したり、家族全体の解決に向けての援助の在り方を考える。また、介護を家族の発達課題の一つであると考え、介護による家族の絆の深まりや世代間の交流や理解の促進など、家族にとってのプラス面にも注目する。

つまり、今まで経験したことのない介護という新しい課題を担う家族が、「介護家族」であり、その家族が介護という発達課題を乗り越え、セルフケア機能を十分発揮できるよう支援するのが介護家族の専門的な考えだと言える。本稿では、仮説として、希薄な家族関係の中ではこれまで上げた「介護家族」の概念にはなかなか難しい課題となるが、介護家族が多様化し、家族成員がいろんな事情で減少することは、家族機能そのものの脆弱を意味する。したがって、家族機能が脆弱した昨今、家族だけに介護を担わせることは不可能であり、介護の社会化の波を受けて社会資源の導入が図られている。

しかし、全面的に移行できるわけではなく、介護の大部分は介護家族に委ねられている。その中で、介護は積極的に向き合うことや介護者の強みを活かすアプローチに目を向けられている。介護から得られる肯定感がストレス対処の仕方、介護の負担感の軽減、介護継続意思の促進にプラスに作用することが明らかにされている。介護家族の状況をアセスメントし、適切な社会資源を導入することで介護家族の健康を確保し、社会参加を促進していく。介護家族には、この関わりを通して家族のエンパワメントを高め、介護という新しい課題に介護家族が結束して取り組めるように支援することが重要である。さらに、介護家族が自己実現を目指し、介護体験を価値あるものとして受け止めることができるような

関りも求められている。

Ⅲ. 考察

1. 老親を見る役割

自分自身も年をとるが、当然親も年をとる。いずれは親の介護が必要になる時がくることになるのだが、その際、姉妹（兄弟）で協力してやっていくことができるだろうか。それぞれに家庭があり、仕事がありと事情が違ってくれば、介護への関わり方も違ってくる。特に、女ばかりの姉妹の場合は、結婚をして親元を離れていたり介護の問題が複雑となる。親の介護が必要となった時、ましてや希薄な関係性ではなかなか思うような役割ができなく、協力は難しい。親が考える心理的な思い、親が身体的な衰えが大きくなればなるほど、姉妹（兄弟）関係が希薄な状態であろうとも、親の心は子どもに向けられていると考える。どんなに不仲な姉妹（兄弟）と解っていても、親はこれまでの子育てしてきた不仲な要因者であっても、子どもへの思いは深いものである。

ましてや、親が老体になればなるほど、心理的に精神状態は自分の分身へと心が動く。本来なら、どんなに希薄的な姉妹（兄弟）関係であっても、そんな親の心情を考えると、親を送るまでは、親を悲しませることはしたくなく、気持ちよく姉妹（兄弟）関係の環境を創っていきたいもの、見せたいものである。

2. 親の対応・不仲な姉妹（兄弟）となる原因

一番身近な存在である姉妹（兄弟）とうまくいかない場合には、それなりの理由がある。

1) 親の対応

幼少期での子育て過程では、家庭はとても大切な自分の居場所である。一番身近な両親の影響を強く受けて育つ。自分以外の存在の愛情を実感するのもこの時期であり、信頼関係を育むのも、まずは両親からである。親の対応次第では、将来的な対人関係の構築にも支障が出てしまう。

2) 相性

両親が無理に仲良くさせようと働きかけることで関係が悪化してしまうこともある。同じ遺伝子を受け継ぐ姉妹（兄弟）といっても、人間である以上相性がある。血の繋がりがあっても、どうしても受け入れられないところや乗り越えることができないことはある。

3) 能力の差への比較

子どもにとって姉妹（兄弟）は一番身近な家族であるとともに、年齢差はあっても同じ条件を持たされるライバルでもある。知らない間に心の中に対抗心が芽生えてしまったり、自分の至らなさに気が付いて姉妹（兄弟）を認められなくなってしまうことも多い。

4) 喧嘩の延長

姉妹（兄弟）は喧嘩をする機会も多く、喧嘩がズルズルと長引いて、意地を張ってお互いを認め会えなくなることもある。一旦は両親から仲裁されて仲直りができても、大人から見ればくだらないことにこだわって、なかなか心から仲直りができない。

5) 共通するものがない

子どもの性格はとても個人差が大きく、姉妹（兄弟）であっても好きな食べ物の傾向が違ったり、服装の好みや趣味も全く違ったりすることもある。子どもながらも話題がなく、あまり話をしなくなったままお互いへの興味を無くしてしまいがちである。

6) 何となく

姉妹（兄弟）の中が悪い原因では、意外と多いのが「なんとなく」とか「特に原因は見当たらない」といった理由である。姉妹（兄弟）はお互いにとって一番身近で、あまりにも長い間一緒にいるだけに小さな不仲のきっかけが積み重なっているだけであり、明確な「ここが嫌だ」という理由が見つげにくいのも現実である。

7) 距離が近すぎる

安らげるはずの家庭にいるにもかかわらず、距離が近すぎるため我慢を強いられることもある。心の中に、怒りの矛先が全て姉妹（兄弟）に向いてしまうことがある。姉妹（兄弟）は、喧嘩をしても離れられない緊密な距離で過ごすため、友達のように我慢して付き合う必要もなく、甘えが出て八つ当たりに対象にもなりがちである。

3. 姉妹（兄弟）の仲を改善する対応

本稿では、親が与える姉妹（兄弟）の不仲の原因を挙げたが、反対に仲を改善する対応にも考察する。両親は姉妹（兄弟）の中に大きな影響を与えるが、プラスの方向に働きかけることで、姉妹（兄弟）の関係を改善できる可能性もある。子どもたちの関係にあまり干渉する必要もなく、反目するのではなく、お互いをスムーズに認めあえるように促す働き掛けをしてみる必要がある。それには次のように考えられる。

1) 愛情をストレートに伝える

子どもは、身近に姉妹（兄弟）がいると、どうしても心の中に親の愛情を勝ち取ろうという競争心をもってしまう。子どもにはスキンシップなどで愛情を示すことが必要とあり、言葉だけではなく、安心できる気持ちを解きほぐす親の姿勢が一番重要となる。

2) ポジティブな言葉をかける

子どもは厳しい言葉やネガティブな言葉を掛けられると、ストレートに心が傷ついてギスギスし、家族関係を悪化させてしまいがちである。子どもにはどんどんポジティブな言葉を掛けて、心に余裕を持たせることが必要となる。そして、姉妹（兄弟）の立場を意識して褒めてあげる。こうすることで子どもたちの心が説きほぐされることが多い。

3) 姉妹（兄弟）はまとめて扱う

子どもにとって、姉妹（兄弟）がまとめて扱われることで姉妹（兄弟）に対するチーム意識が生まれ、自然と姉妹（兄弟）が協力しやすくなる。抱きしめるのも一緒にまとめて愛することをわかりやすく表現することが大切になる。

4) 子どもの言い分をよく聞く

子どもが僻みを持ちやすいのは、自分が認められていないという思いを持っている証拠である。このような僻みは自己肯定感の否定に繋がりがやすい。したがって、子どもの話は十分に聞き、子どもを認めてあげることである。子どもからの話には、必ず「ながら」姿勢ではなく、しっかりと目を見て向き合って話す努力を親が続けることが重要とある。そうすることで、子どもは嫉みなどのマイナスの感情を持ちにくくなり、自分を認められることで姉妹（兄弟）のことも受けやすくなる。

上記のように、親が与える「正」の姿勢には、大きな反映を生み出すことにもなり、姉妹（兄弟）の仲も良くなることを理解する。心は体とともに成長し、大きくなってから姉妹（兄弟）の仲が良くなる可能性は高い。親の姿勢には、子どもが幼少期の時に将来に渡っても根を残すような相手に対する過激な敵対心や嫉妬心を抱かせないことが大事であり、子ども同士が姉妹（兄弟）喧嘩をしたら、さりげなくフォローすることも忘れてはいけない。また、両親は、「お姉ちゃん、お兄ちゃんであること」「妹、弟であること」を強要しないほうが上手くいく傾向があるという。両親はあくまでも中立の立場をとった方が、お互いへフォローをしやすくなるようだ。

4. 性格の合わない姉妹関係

姉妹（兄弟）関係で不仲に悩む人の理由に一番多いのが「性格が合わない」と多数挙がる。特に性格の違いで対立が根深くなるは、同性である「姉妹」とある。では、どのような性格同士の姉妹に不仲原因があるのか、なりやすいのかを考察する。

母娘カウンセラー（横山 2016）は大きく分けて2つのパターンがあると言う。

1) (パターン1) 片方がネガティブでコミュニケーションが得意でないタイプで、もう片方が社会的で明るく、友達が多いタイプ

簡単に言えば、「陰と陽」の関係性をいう。この組み合わせで上手くいく場合もあるが、そうでない場合、ネガティブな方が明るい姉妹に対して「自分とは違う面で許せない」という思いを一方的に抱いてしまう。また、一方が恨みを抱いていても、恨まれる側は「大丈夫かな」と相手を心配したり、できれば上手くやっていきたいという思い、歩みよったりすることも多いという。このように正反対の場合には、嫉妬される側が相手の気持ちに配慮するのがうまくやるコツといえる。自分が順調に活動している時など、親に伝えても相手側には余分なことは言わない方がうまく関係が成り立つとある。また、逆に自分の弱い部分を見せたり、相談したりすると、「自分が感じていたのとは違い、意外と大変なの

だ」と思い知り、相手の嫉妬心が和らぐともいう。

2) (パターン2) どちらも強気なタイプ

このパターンの場合、どちらも「私が、私が」と前に出るタイプ。長女は「私が年上だから」と権力を握りたがり、妹は「自分の方ができるのに、年上だというだけで威張るな」と思うパターン。

特に、三姉妹の場合、上二人の間で三女がうまく立ち回ることもある。しかし、三女の傾向としては、八方美人で、調子のよいタイプが多い。

強気同士の組み合わせの場合、家族のイベントなどで、どちらがイニシアティブを握るかによって、一方が面白くない思いをしたり、突っかかったりすることが不仲の引き金になるようだ。

強気同士の場合に考えてほしいのは、相手に譲ることが「負ける」ことではないこと、先を読み、相手が打つ手を想定しておくことで、衝突せずに折り合いをつけえることが大事である。「相手をこんな難しい人と上手くやれる自分のマネジメント力は凄い」と思うようにすれば良い。「陰と陽」のタイプの差はあっても、長い人生では、それが逆転するときだってあるはずである。姉妹に対する嫉妬心が抑えられない人は、今が上手くいかない時だと考えるようにし、上手くいっている人は、姉妹を刺激する無神経な言動がないかを振り返ることが必要ではないであろうか。

5. 姉妹（兄弟）が学ぶこと

子どもころの喧嘩には、親はあまり神経質になる必要がないという。姉妹（兄弟）だからこそお互いに興味や愛情を抱いているからこそ、嫌な思いをしてでも相手に喰らいついていくようだ。

姉妹（兄弟）のいない子どもより、たくさんの異年齢の姉妹（兄弟）に囲まれた子どもは、我慢ができたり、自己主張ができるなどの対人スキルを身につけることができる。姉妹（兄弟）喧嘩は、将来他人と対立してしまった時に和解する方法を学ぶ良い機会だと言える。両親は、無理に姉妹（兄弟）喧嘩を止める必要はなく、怪我をさせることなく、さりげないフォローをしながら見守ることが重要である。

6. 親の心情

親は当然、子どもよりも先に人生の終焉を迎える。だからこそ家族を残したいと考える。複数の子どもの作る目的の中には、「万が一のときには、子どもたちが淋しい思いをしないように、協力できる家族を残してあげたい」という思いもあると言う。だからこそ、姉妹（兄弟）の仲が悪いと親は不安になってしまうが、姉妹（兄弟）同士のいがみ合いは、誰かと協力し合っていくことの必要性を学ぶ大事なステップであるという。時間はかかっても、相手を思いやる気持ちや、相手に合わせる心の合わせ方を学ぶ最高の学びの場である

という。姉妹（兄弟）仲の悪さは長い目で見守るのも親の肝心な役割でもある。

7. 不仲な姉妹（兄弟）縁の遮断

姉妹（兄弟）不仲に深刻な思いで悩んでいる人の中には、「縁を切りたい」と考える人もいる。いくら不仲であっても、そこまで思う心情はいかかなものか。「縁を切りたい」と思う原因は、どちらかが嫌がらせなどでメンタルをやられてしまい、もう関わりたくないという思うことが言える。また、薬物や、アルコール、ギャンブルなどの依存症や借金があり、その影響が自分や家族に振りかかることを恐れることもあるという。姉妹（兄弟）関係では大人になるとお互いに家庭を持つこともあり、他人が付く、第三者からの悪知恵も入り込んだ大きな溝の原因ともなる。

IV. 検証

1. 母子一体性

家族の人間関係はいろいろな絆によって保たれているとは言うものの、人間関係のそもそもの始まりは、母と子との関係である。特に娘というものは、母親になる受け継ぎの一体性を持ち、息子と母親との関係とは違うものと知る。どんな子どもでも、男も女も母親から生まれてくる。生まれるまでは、子どもは、母親と文字どおり一心同体であるという。この母子一体性を基礎として子どもが育ってくるのであり、ここに障害があると、拗れの始まりとなる。

また、母なるものは「抱合する」機能を主とするものであることも理解し、それ自体、肯定的、否定的の両面を持っている。子どもを包み込んで養っていく肯定面と、包み込む力が強すぎて子どもの自由を奪い、呑み込んでしまう否定的とが存在する。子どもは一人の母の中に、このような二つの面を見ていることが多い。

我が国は母性原理の強い国であるから、母親の肯定的な像というものは、疑いを許さない存在として考えられてきた。したがって、母親がどんなに良い母親であっても、母親の否定的側面がにわかに意識されてくる。母親の親切は子どもにとって、自分を呑み込もうとするたくらみさえ感じられる。

家庭内暴力を振るう子どもに接すると、このような子どもが母性の否定的側面に極めて鋭敏に反応していることが感じられる。このような子どもの母親は、母性の善意とういうことに絶対的な信頼を持ち、子どもに「親切に」接しようとする。日本における母子の絆は測り難い強さを持っているのである。姉妹（兄弟）の拗れにも、母親の養育家庭での要因が強いことが検証され、子どもが持つ自立の力もその起因となることも理解できる。

また、人間が自立していくということは、自分の心の中に存在する母なるものの元型と、現実の母親との混同を避け、いつでも、何でも助けてくれる絶対的な母なるものや、何で

も呑み込んでしまうような凄まじい母なるものなどを母親に投影して問題を起こすのではなく、自分の内界に存在する母なるものからは自立していくと共に、現実の一個の人間としての母とは、お互いに限界を持った人間同士として付き合えることが言える。

2. きょうだいは他人の始まり

我が国においては、「血のつながり」を重視する傾向が、欧米に比べて強いが、いかに血はつながっていても、結局は、兄弟は別れていき、利害関係が優先するようになることを、古来「兄弟は他人のはじまり」と言うように表現することがある。これは、肯定的に解釈してみると「きょうだいとの関係によって、人間は他人との関係のはじまりを経験する」ということになるだろう。つまり、きょうだい関係によって、人間は他人との付き合い方を練習すると考えられる。確かに、子どもたちは小さい時から、きょうだいの存在によって、他と分かち合うこと、強調することなどを学ぶことになる。

さらに、競争心をどのようにコントロールするのか、という難しいことも、知らず知らずのうちに学んでいくことになる。また、悲しみや喜びを他人と共にすることが、自分にとってどれほど意味あることかを体験することになるのである。子どもにとって、両親（特に母親）と自分の世界は、絶対的と言って良いほどのものである。そのような中、他人、つまり（自分の弟妹）が入り込んでくるのは、世界の崩壊にも等しい大事件となるのである。子ども自身、重大な世界観の改変を経験することにもなる。そして、次男、次女として生まれてくる子どもたちは、生まれてくる時から、自分より先に、自分と母親という絶対的な結合に割り込んでくるものが存在しているという事実を受け容れなければならない。我が国の多くの親の心の中に、大なり小なり存在していること、それは、親が子どもを大切にすればするほど、子どもは幸福である。そして、大切にすることは、物を豊かに与えること、という極めて単純な考え方がそこには存在しているのである。

3. まとめ

家族とはいったい何であるのか。本稿では、これは自明のこのようであらざるに難しい問題である。

また、世界の中には、いろいろと異なった家族制度や家族形態の存在することが明らかにされてきている。さらに、最近の文化人類学の目覚ましい発展によって、世界の中には、いろいろと異なった家族制度や家族形態の存在することが明らかにされてきている。

本研究の家族社会学では、家族の成員間の近親性、家を中心とする生活の共同性、その日常性、など、家族を規定する重要な要素として考える。また、有名な学者であるパーソンズは家族以外においては十分に遂行されえない機能として、育児（社会化）と大人の情緒安定機能をあげている。

このような考えは一応納得のいくものであり、心理的に家族を考えていく上においても、

有用なものと思われる。そして、家族という中の親の在り方、歳を重ねて身体的な衰えが出てくる老親の思い、若い時の親の力量とも大きく違いが現れ、これまでの養育過程で作り上がった親子関係でも、本心は「自分の子どもたちの心はいつまでも繋がって欲しい」と気づかされている。

家族というものは、家族のそれぞれにとって、「情緒安定機能」を果すものになっているのではないだろうか。一般的に、家庭というと「憩いの場」であると考えられる。しかし、憩いの場どころか、家族の人間関係で地獄の苦しみと言ってよいほどの苦痛を味わっている人達がたくさんいると考える。

家族とは、「実存的対決」などという表現を（河合 1980）は言うが、家族とは、近い関係である人間同士がぶつかり合うところに家族関係の面白さ、難しさが存在しているものとある。姉妹（兄弟）の縄れ、拗れは親の養育過程（特に母親）に原因が絡み合って作り上げた成員間の歪みであることを理解する。

老親となる前に母親が縄れ、拗れの繋がりを修復をすることも考えられる。拗れた希薄な姉妹（兄弟）だけでは、成員による環境等もあり、修復は非常に不可能であることも理解する。謎めいた心の渦は、拗れた姉妹（兄弟）にはそうそう簡単には修まる術はないと考える。

【引用文献】

横山真香『長女が“母の呪縛”から自由になる方法』2016年 大和出版
河合隼雄『家族関係を考える』1980年 講談社現代新書

【参考文献】

- [1] みずがきひろみ『母の呪縛をといてありえないほど幸福になる方法』2019年 河出書房新社
- [2] 優慧太『長女・次女・三女なぜか不思議な三姉妹』2011年 Kindle版
- [3] さんりょうこ『姉妹あるある』2014年 レッカ社
- [4] 清水美代子『介護家族の支援のあり方に関する一考察』2012年 研究報告

【参考資料】

- 1) 姉妹関係・仲の悪さは母親の影響・関係を修復するには pp. 2-3
<https://notesmarche.jp/2014/11/13049>
- 2) 兄弟トラブルの心理学 pp. 3-6
<https://news.yahoo.co.jp/byline/usuimafumi/20140928-00039450>
- 3) ママたちの「きょうだい不仲」の悩み pp. 4-5
<https://www.mamatenna.jp/article/34649>
- 4) 機能不全家族 pp. 5-9
<https://cocoronokokuban.jimdo.com>
- 5) 親の介護が必要になったら姉妹の場合 pp. 9-13
兄弟姉妹の仲が悪くて悲しい
<https://moomii.jp/kosodate/brothers-and-sisters.html>
- 6) 性格の合わない姉妹の関係改善のコツ pp. 12-13
<https://www.mamatenna.jp/article/34661>